

演題番号

14

終末期ケアを見つめなおして

～みんなで話そう！デスカンファレンス～

城南中央病院

2階病棟・リハビリ課



## はじめに

城南中央病院は、終末期の患者様が多く、年間50人前後の方と最期を共に過ごし、これからも多くの方の最期に立ち会う病棟である。

終末期ケアの質を高める目的で行ったアンケートにて、約9割のスタッフがケアに悩んだり、戸惑いを感じていることが分かった。

そこで、デスカンファレンスを行ったところ、スタッフの想いを知ることができ、今後の当院の終末期ケアに活かせると実感できたので、以下に報告する。

### \* 用語の定義 \*

デスカンファレンスとは？

死亡退院後に開催され、患者の経過や関りなどを振り返るカンファレンスである。

## 目的・対象

### 目的

デスカンファレンスを開催し、終末期ケアにおける課題を抽出し、今後の終末期ケアの質の向上を図る。

また、ディスカッションを通じ、死に直面したスタッフの心理的不安の解消・心理的負担の軽減・個人個人の成長を支援する。

1)宮下光令・林糸り子:看取りケア プラクティス×エビデンス, P277～P298

### 対象

職員(看護師・介護職・リハビリ課・相談員)

## デスカンファレンス開催方法

死亡退院後、1週間程度経過した患者様を対象に水曜日の病棟カンファレンスにて開催した。主な検討内容は、以下の3項目とした。

- 1.十分な症状緩和が出来、不必要な医療処置を行う事がなかったか？
- 2.今回の終末期ケアを振り返り、良かった看護、またそうでなかった看護とは？
- 3.退院時のご家族様の様子

### △カンファレンス開催上の注意点 △

- ・全職種参加型で、自由に発言でき、それに対して、非難や責任追及をしない。
- ・全員が1人の患者様を見送ったチームであり、お互いをリスペクトする。

2)伊藤桃子・青沼友紀：一般病棟におけるデスカンファレンスの取り組み  
～終末期ケアの質の向上を目指して～

## ケース紹介

### 【ケース1（〇〇様・91歳）】

入院期間：44日

肺炎後の廃用症候群にて入院。経口不可。代替手段はご家族様希望せず、末梢点滴で経過。入院時より呼吸状態不良。認知機能低下あるも、簡単なやり取りは可能。家族関係は良好。上肢機能は保たれており、上肢抑制対応。老衰にて死去。

### 【ケース2（△△様・89歳）】

入院期間：797日

入院時から持ち込みで多数褥瘡あり。経口摂取していたが、徐々に全身状態悪化し、CVポートから高カロリー輸液実施。話好きで冗談を交えた会話をする一方で、頑固な性格で要望も多く、接し方の難しいケース。終末期に入り、褥瘡多発。老衰にて死去。

## 結果1 ケース1(〇〇様)

### 1.十分な症状緩和が出来、不必要な医療処置を行う事がなかったか？

- ・ご家族様の希望に沿った栄養管理方法で経過出来た。
- ・徐々に衰弱していったが、肺炎や褥瘡等なく最期を迎えることができた。
- ・スタッフで検討し、抑制不要と判断し外すことができた。

### 2.今回の終末期ケアを振り返り、良かった看護、またそうでなかった看護とは？

食が太い方だったので、大好きだった焼き肉のタレを2回お楽しみで提供する事ができた。2回のみだったので、もっと早めから対応していればという思いもあったが、ご家族様から「弱ってきてから」という希望もあったので、回数・時期は妥当だったと思う。

### 3.退院時のご家族様の様子

患者様と対面時涙ぐむ様子は見られたが、落ち着かれており、覚悟が出来ていたように見受けられた。最後に「ありがとう」と何度も感謝の言葉を言ってくださった。



- ・各職種で終末期ケアに対する視点の違い・心残りなど、想いの違いを共有できた。
- ・スタッフが感じていた後悔を受け入れてもらえ、行ったことを認めてもらえた。

## 結果2 ケース2(△△様)

### 1.十分な症状緩和が出来、不必要な医療処置を行う事がなかったか？

- ・スムーズにCVポートへの移行を図れた。
- ・終末期に発生した褥瘡はKTU(\*1)と思われたが、悪化せず経過出来た。

### 2.今回の終末期ケアを振り返り、良かった看護、またそうでなかった看護とは？

- ・関節拘縮の強い方だったので、ポジショニングが難しく、周知が十分ではなかった。
- ・もっと保清に力を入れたいと思った。具体的には爪切りや髭剃りの頻度見直しや入浴困難な方への手浴・足浴・洗髪など行いたい。

### 3.退院時のご家族様の様子

取り乱す事はなく、「長い間、お世話になりました。ありがとうございました。」と落ち着いた様子だった。



- ・今後のケアの在り方・改善点についての意見が聞かれた。
- ・具体的な反省点・対策も挙げる事ができた。

(\*1)KTU(Kennedy Terminal Ulcer):終末期の防ぎきれない褥瘡

## 考察

- ・経験年数や職種の違いはあるが、デスカンファレンスを開催することで、ケアを見つめ直し、想いを伝えあうことで自己肯定感の向上に繋がった。
- ・メンタルケアとしてスタッフの心残りを表出することで、終末期ケアで感じた葛藤やストレスを軽減できたと思われる。
- ・良かった点だけでなく、行ってきたケアの至らなかつた点を明確化することができ、次のケアに生かせるような具体的な対策案を挙げることができたので、今回のデスカンファレンスは有意義だったと思われる。

3)広瀬寛子(2010.1):明日の看護に生かすデスカンファレンス,看護技術P64~P67,  
メヂカルフレンド社

## 展望・謝辞

- ・患者様へのケアを振り返ることで、次の患者様へと繋がる学びを得ることができ、関わったスタッフ同士がお互いを認め、癒し、支え合うことでチーム力を高めることに繋がるのではないかと。
- ・今後、医師への参加の協力を求めることと、話しやすい雰囲気づくり(茶話会形式)を検討したい。また、患者様・ご家族様の思いなど、情報の共有を目的としたターミナルカンファレンスの開催を検討していきたい。

本研究の実施にあたり、ご協力頂きました職員の皆様に心より感謝申し上げます。